

児童養護施設における子ども支援活動

—Action! 子ども支援! 児童養護施設の子どもの学習ボランティア(2012年～2013年)—

西垣美穂子

伊部 恭子

[抄 録]

児童養護施設の A 施設において、2012 年～2013 年の 2 年間に、学生による夏休み期間中の子ども支援活動を行ってきた。施設内の子どもたちを対象とした、学習支援等である。学生と子どもが 1 対 1 の関わりを、学習支援と遊びを通して継続的に行うことで、関係を築き、子どもにとって安心した環境で学ぶことをサポートすることにつながった。

参加した学生にとっては、将来、社会福祉現場の専門職として働くことを希望している学生や、今後実習に行く学生も多いことから、その前教育としてもこのプログラムは大きな役割を果たした。それは活動のふりかえりの中で、児童養護施設に対するイメージの転換、子どもとの関わり方、その他様々な自身の内面の気づきなどを活動で学んだこととしてあげられている。

本報告では、2012 年から行ってきた子どもの学習ボランティア活動について述べるとともに、学生が得た学びを通して、今後の展開に向けての課題を考察する。

キーワード：児童養護施設、学習ボランティア、地域福祉フィールドワーク

1. はじめに

ここでは、本学福祉教育開発センター（以下、「センター」と表記）による「地域福祉フィールドワーク事業」から、児童養護施設における子ども支援活動—「Action! 子ども支援!」—について報告する。

地域福祉フィールドワーク事業は、2008 年度より発足し、社会福祉学部に所属する学生教育支援として、これまでにさまざまな活動を展開してきた。詳細は後述するが、6 年目となる今年度は本事業において 7 つの企画が実施され、「Action! 子ども支援!」はその一つである。

「Action! 子ども支援!」のプログラムが具体化したきっかけは、2012 年 4 月に、京都市内のある児童養護施設（A 施設）から、大学生による夏休み中の子どもの学習支援活動の実施について提案を頂いたことによる。学生が活動を通して、児童福祉への関心を深めたり、社会福祉や保育、教育等の実習事前学習として活かしたりする契機となるのではないかという期待があった。1 年目は 17 名の学生が参加し、実際に子どもと関わるなかで豊かな学びの機会を得ることができた。また、A 施設からも「子どもたちにとって良かった」、「一人ひとりの

子どもに、マンツーマンで学生が一定の時間関わってくれることはとても大きな意味がある」といった感想や評価を頂いた。そこで、本活動をさらに継続的な取り組みとして位置づけるべく、2年目の今年度は、センター事業の地域福祉フィールドワーク事業として予算化し、実施した。

このように、「Action! 子ども支援!」は、今年度センター事業として企画されたものであるが、その前身には、昨年度の取り組みがある。今年度も活動に参加した学生が、大変貴重で豊かな学びの経験を重ねており、次年度以降も継続予定である。

よって、本稿では、この2年間のA施設における夏季休暇中の子ども支援活動をふりかえることを通して、その意義と意味を明らかにし、今後の展開に向けて課題を整理することを目的とする。

具体的には、まず、2年間をふりかえり、取り組みの概要や特徴を述べる。次に、今年度、「Action! 子ども支援!」に参加した学生にとって、どのような学びの機会となり、どのような成果があったのかについて、事前オリエンテーションや、学生の記した「活動ふりかえりレポート」及びふりかえりの会等を取り上げて検討する。それらを通して、本プログラムの意義を明らかにするとともに、今後に向けての課題と可能性を述べたい。

2. 2012年度の取り組み

(1) 背景と位置づけ

2012年4月、本学が日頃から実習やボランティア等でお世話になっているA施設の施設長より、学生による夏季休暇中の小学生への学習支援に関する企画について提案を頂いた。その目的は、主として以下の二つである。1つには、児童福祉領域に関心があり、社会福祉や保育分野の実習を予定している学生、進路を児童福祉関連で考えている学生等にとって、A施設における子ども達への学習支援活動が、実体験を伴う学びの機会となることである。2つ目には、A施設の子どもにとっても、夏季休暇中に学生とふれあい、一定時間の学習等による個別的な関わりをもつことが有意義な機会となるということである。

A施設と本学部との関わりについては、以前より施設長を招いて社会福祉士実習報告会等で講評の機会を頂いたり、学生がボランティアや実習でお世話になったりする等、教育支援に関する交流を重ねていた。そうしたなかで、2012年度に夏季休暇中の学生による学習支援活動が開始された直接のきっかけは、社会奉仕や国際親善等を目的とする社交団体（以下、「Z社会奉仕活動団体」と表記する）より、記念事業として申し出を受けたA施設から、本学教員への企画提案を頂いたことによる。本学社会福祉学部・福祉教育開発センターにおいて協議した結果、学生の貴重な学びの機会となる企画として積極的に実施していく旨を決定し、具体的な学生支援及び活動運営に関して、社会福祉士実習の児童領域担当教員3名（加美嘉史、所めぐみ、伊部恭子）が携わった。

(2) 取り組みの概要

2012年度の取り組みの全体像は、表1の通りである。

①5月～7月：活動募集、事前オリエンテーション、施設見学

学習支援活動に先立ち、A施設の施設長と本学担当教員との数回の打ち合わせをふまえ、本学社会福祉学部2～4回生を対象として参加募集を行った。第1回目の事前オリエンテーション（募集説明会）では、25名の申し込みがあり（男子8名、女子17名）、学年別の内訳は2回生9名、3回生9名、4回生7名であった。申込者の殆どは、児童福祉施設等で福祉・保育等の実習を希望している者、あるいはすでに実習を終えた者である。申し込み後、学生8名が実習その他による日程調整困難等の事情で辞退し、最終的な参加希望者は17名（男子4名、女子13名）、その内訳は2回生7名、3回生6名、4回生4名となった。なお、本プログラムの実施は初めてであることから、社会福祉施設等でのボランティア経験が少なく、大学生活にもまだ慣れていないと考えられる1回生の募集は見送ることとし、今年度の結果をふまえて次年度以降に検討することとした。

17名という学生数については、A施設から適切である旨、了解を得た。A施設には、小学生が20名程いるが、夏季休暇中、お盆等で家庭への一時帰宅があり不在となる子どもも複数いることから、子どもと学生がほぼ一対一で関わることはできないのではないかとのことであった。

参加者決定後の第2回目のオリエンテーションでは、学生が主体的に活動を行うことを目的として、メンバー紹介、グループづくり、事前準備等を行った。A施設長からは活動内容や諸注意事項等について具体的な説明がなされた。また、7月にはA施設において見学と担当職員によるオリエンテーションが行われ、学生が具体的な活動イメージをもつことができるような工夫と配慮をして頂いた。なお、学生の活動中のトラブルや事故等の発生時、また、やむを得ず欠席しなければならない場合等には、速やかに学生から施設職員に相談・報告するとともに、本学担当教員、学生グループリーダーに連絡する旨の周知を行った。守秘義務を含めた基本的な諸注意、トラブル等の発生時の対応は、基本的に社会福祉士実習に準じている。

②8月：学習支援ボランティア活動の実施

活動は8月中に2回に分けて行われた。第1回目は8月6日(月)～13日(月)、第2回目は8月14日(火)～21日(火)、いずれも土日曜日を除く各々6日間である。活動時間は午前中の2時間であった。一人ひとりの子どもに対する学習支援プログラムや内容については、A施設担当職員が教材等を検討して企画され、事前の施設見学オリエンテーション等にて学生への説明がなされている（資料1）。

【表 1】 2012 年度 学習支援ボランティアの日程・活動

日 時	活動内容等	参加者	場所
5月24日(水) 昼休み (12:15～12:45)	第1回オリエンテーション ・活動主旨・内容説明 ・A施設紹介 ・Z社会奉仕活動団体紹介 ・参加申込シートの配布	A施設長 Z社会奉仕活動団体関係者 ボランティア希望学生 25名 本学担当教員3名	本学
6月7日(木) 昼休み (12:15～12:45)	第2回オリエンテーション ・活動参加者決定と紹介 ・A施設長からの活動説明 ・自己紹介とグループづくり(第1班、第2班) ・事前準備(連絡網、活動上のマナー・注意事項等、保険の加入、事前学習・準備等)	A施設長 ボランティア活動学生 17名 本学担当教員3名	本学
7月	A施設オリエンテーション ・施設内見学 ・施設職員より活動内容、注意事項等説明	ボランティア活動学生が小グループに分かれて参加	A施設
8月6日(月)～13日(月) 9:00～11:00 (6日間)	第1班 学習支援ボランティア活動	学生 10名	A施設
8月14日(火)～21日(火) 9:00～11:00 (6日間)	第2班 学習支援ボランティア活動	学生 7名	A施設
8月25日(土)	活動ふりかえりレポート提出の日 ・学生自身が学んだこと、今後の課題等 ・次年度の活動プログラムに活かすための改善点、要望等	学生 13名提出	本学
8月28日(火) 10:00～11:30	活動ふりかえりの会 ・A施設、Z社会奉仕活動団体からの報告、コメント ・学生からの報告 ・担当教員によるふりかえりと今後の課題等報告	A施設長・担当職員2名 Z社会奉仕活動団体関係者3名 学生9名 本学福祉実習課長、担当教員2名	A施設

③8月下旬：活動のふりかえり

学習支援ボランティア活動終了後のふりかえりは、次の2つの方法で行われた。1つには、学生にレポートを課してふりかえりの機会とした。レポート内容は、「(i) 学生自身による活動のふりかえりとして、活動を通して学んだことや今後に向けての課題」、「(ii) 今後の本プログラムの発展に向けての改善点や要望等の意見」についてである。17名の参加学生中、提出者は13名であった。2つ目は、ふりかえりの会の開催(8月28日(火))である。A施設において、施設長、担当職員、Z社会奉仕活動団体関係者、学生9名、本学教職員3名が集い、和やかな雰囲気の中で行われた。

これら2つのふりかえりの機会を活用した学生数は、ボランティアに参加した全学生17名よりも少ない。その背景には、学生の諸事情(参加困難な日程等)のほか、本プログラムを含む地域福祉フィールドワーク事業の位置づけが課外活動であり履修科目ではないこと、即ち単位認定という縛りが無いことが考えられる。学生の主体的な学びを重視し、活動をどのようにふりかえるか、その位置づけやあり方は今後の課題である。しかしながら、ふりかえりの機会そのものは、学生にとっても、本プログラムを企画した側にとっても、非常に有益であった。

ふりかえりレポート及びふりかえりの会における学生の感想・意見等は多岐に渡り、そのすべてを紹介することは困難であるが、ここでは幾つか代表的なものを挙げてみたい。

まず、活動を通して学んだことや自己の課題等については、子ども理解、コミュニケーションの困難や工夫、施設理解(職員の仕事理解、施設環境の理解)、自己理解・自己覚知に関する内容等があげられていた。例えば、「子どもと向き合い続ける大切さを学んだ」、「一人ひとりの子どもに合った関わりが大切であることに気づいた」、「短期間ではあるが、子どもが成長していく姿を感じとることができた」、「施行錯誤の連続でコミュニケーションの難しさを知った」、「職員の方が愛情をもって子どもと関わっていることを学んだ」、「自分自身のこれまでの偏った見方や考え方に気づいた」、「単に子どもの宿題等の学習をみるだけではなく、子どもと一緒にやりとげる喜びや達成感を分かち合うことが大切だと気づいた」、「普段見学などは困難な中で、児童福祉実習に向けて具体的に理解する機会となり役立った」、「児童福祉の仕事をしたいという希望をより強くしてくれる経験の一つとなった」等、参加した学生にとって学んだ成果は大きかったといえる。

また、本プログラムを次年度以降継続していく上での改善点や要望等についても多様な意見が出された。その主な内容は、子ども理解、子どもとのコミュニケーション、活動内容の充実に向けて等である。例えば、「ボランティア活動の前にどのような子どもと関わるかについて理解しておきたい」、「最初から学習支援を行うのではなく、アイスブレイクなどのプログラムや交流的なものがあれば、学生側の戸惑いが軽減すると思う」、「前半グループから後半グループへの引き継ぎがなされると、よりスムーズに活動できるのではないか」、「学生の名前をネームプレートなどにつけると、子どももわかりやすいのではないか」、「子どもの集中力を引き出

【資料1】2012年度A施設における 学習支援ボランティア活動概要

- 対象は小学生18名(男子7名、女子11名)を対象とした学習支援。
- 活動時間は午前9時から11時までの2時間。1時間目は宿題やドリル・問題集を用いた学習支援を行う。
- 2時間目は顕微鏡キットや手芸・工作等の自由研究を行う。
- 2時間目の自由研究の教材と目的、内容(予定)は以下の通り。

【自由研究の教材と目的】

- * 顕微鏡～普段生活を送っているだけでは見ることができない世界を覗き、知らぬ間に触れている微生物を知る。
- * 天体観測～普段何気なく見ている星空への知識を深め、小学生キャンプに行った際にも知識を持った上で楽しめるような取り組みをする。
- * 手芸(女子のみ)～マスコットを作成することで、物を作ることの楽しさを知る。
- * 京都の歴史学習～自分たちの住んでいる町にある建造物の歴史を調べる。
- * 自由工作～創造力を養い、物を作ることの楽しさを知る。
- * しいたけ栽培キット～食べ物がどのようにできるのかについて学び、普段の「食」への興味と感謝の気持ちを養う。
- * 体力づくり～大人数でしかできない遊びを通して、「協調性」、「規範意識」、「集団行動」を学ぶ。

【自由研究の内容・予定(変更の可能性あり)】

＜第1班＞

8月6日(月)	8月7日(火)	8月8日(水)	8月9日(木)	8月10日(金)	8月13日(月)
準備	男：京都歴史学習 女：天体学習	男：京都歴史学習 女：天体学習	男：自由工作 女：手芸	男：自由工作 女：手芸	男：自由工作 女：手芸

＜第2班＞

8月14日(月)	8月7日(火)	8月8日(水)	8月9日(木)	8月10日(金)	8月13日(月)
顕微鏡学習	体力づくり 「缶けり」	体力づくり 「ドッジボール」	体力づくり 「逃走中」	男：天体学習	天体観測

○心構え

- ・子どもたちが楽しむことができ、目的を達成できるように。
- ・子どものモデルとなるような行動、一人の大人として関わる(注意の仕方等)
- ・守秘義務(子どもから手紙などを受け取った場合の対応。職員への連絡等)
- ・服装、マナー
- ・開始時間より早めに来て当日の打ち合わせを行う(8:30集合)

[注]【資料1】は、A施設における事前オリエンテーション時の学生配布資料をもとに一部改編した。

すためにどうしたらよいか、もっと学んでおきたかった」、「活動中に教員との交流の機会が欲しかった」等である。これらの内容は、今後の課題として検討していく必要がある。なお、活動のふりかえりについては、後述する2013年度の活動に関して分析を行っている。これらをふまえ、今後の活動に活かしていくことが求められる。

(伊部恭子)

3. 2013年度の取り組み

(1) 地域福祉フィールドワーク事業として開催

今年度は、子ども学習支援を本学福祉教育開発センター主催の「地域福祉フィールドワーク事業」の一環として行った。

地域福祉フィールドワーク事業は、2008年度に、京都市北区の小野郷学区の地域住民、社会福祉協議会、大学、学生との協働による福祉のまちづくり事業から始まり、5年目を迎えた今年度は子ども支援の取り組みを入れて7事業が行われている。さらに7事業は「地域との協働プログラム」と「福祉団体との協働プログラム」の2つに分けられ、子どもの学習ボランティアは、「福祉団体との協働プログラム」の一つとして行った。

地域福祉フィールドワーク事業は、社会福祉の人材養成を、社会福祉実習だけではなく、実習教育を補完するプログラムとして行われている。学生が配属された実習現場で学ぶだけではなく、自分自身で参加したいプログラムを選択し、住民、関係機関や福祉団体、当事者等と定期的に活動を行っていく中で、地域や社会全体を見通し、地域課題や現場の支援と一緒に携わることによって、企画・開発、生活支援・生活理解、貧困、生存権、権利擁護などを学ぶことにつながっている。

(2) 取り組みの概要

今年度も、A施設で生活をしている子ども(小学生)を対象に、第1回(2013年8月5日～8月9日)、第2回(2013年8月12日～8月16日)のそれぞれ5日間を2回に分けて行った。ボランティアの活動時間は、全日、9時30分～11時30分である。学生は、1回生～4回生まで幅広く計21名(男1人・女20人)が参加を希望した。回生別では、1回生3名、2回生3名、3回生13名、4回生2名である。担当教員は2名(西垣美穂子、伊部恭子)が携わった。

さらに第1回、第2回のボランティア期間の前後も学生とA施設の施設長及び担当職員との交流があり、事前の準備、事後のふりかえりも含めて行った。詳細については、表2の通りである。

【表2】2013年度学習支援ボランティアの日程・活動

日 時	活動内容等	参加者	場 所
6月13日(木) 12:15～12:45	第1回オリエンテーション ・メンバーシップ紹介 ・活動内容・主旨説明	学生21名 担当教員2名	本学
7月11日(木) 12:15～12:45	第2回オリエンテーション ・メンバーシップ紹介 ・活動内容・主旨説明 ・事前準備	A施設長・職員2名 学生21名 担当教員2名	本学
7月中	A施設オリエンテーション ・施設内見学 ・施設職員より活動内容、注意事項等説明		
8月5日(月)～9日(金) 9:30～11:30 (5日間)	第1班 学習支援ボランティア活動	学生11名	A施設
8月12日(月)～16日(金) 9:30～11:30 (5日間)	第2班 学習支援ボランティア活動	学生10名	A施設
8月26日(月)	活動ふりかえりレポート提出の日 ・学生自身が学んだこと、今後の課題等 ・次年度の活動プログラムに活かすための改善点、要望等	学生19名	本学
8月29日(木) 10:00～11:30	学習支援ボランティア活動 ふりかえりの会	施設長・職員2名 学生12名 担当教員2名	本学

6月と7月の事前のオリエンテーションでは、活動の趣旨、内容、メンバーシップの顔合わせなどを行った。特に7月には、ボランティア先であるA施設の施設長と担当職員2名も含めたオリエンテーションを開催し、現在の児童養護施設の子どもの状況や、学習支援の重要性について学ぶ機会を設けることができた。今回のボランティアもまた、一対一の関わりを大切にし、きめ細やかな対応を行うことから、ボランティアに携わる意義を、施設職員から事前に聞くことができたことは、その後の学生の粘り強い継続した関わりにつながったものと考えられる。

さらに、ふりかえりの会では、学生から主にレポートでまとめた内容について報告し、A施設の職員からボランティアとして受け入れた感想や課題が提示され、教員からも成果等を報告し、来年度に向けての課題を共有した。レポートは「(i) 活動を通して学んだこと」、「(ii) 今後に向けての課題」の2つをテーマに課し、学生が自分自身の活動を言語化してふりかえる中で、経験した内容を次回に活かすことにつながったと考えられる。

次に、学生が提出したレポートや、活動終了後に開催したふりかえりの会の内容から、今年度の活動について考察する。

(3) 学生のふりかえりレポートから

学生のふりかえりレポートのうち、「(i) 活動を通して学んだこと」では、以下の点について

て特徴がみられた。

1) 苦手意識や不安感の軽減

これは児童養護施設へのイメージがこれまで講義等の中で学んだ内容や、イメージが先行していたが、初めて施設の子どもたちに接する中で、子どもと関われるかどうか心配であったり、男性と関わることに苦手意識があったりする側面が少なからず、子どもたちとの関わりの中で少し取り除くことができたことである。例えば、次のような内容が記されていた。

- ・「児童養護施設のイメージは、家庭に近い環境というよりも、施設や児童館に近い形…」
- ・「正直、“施設の子”と身構えている部分があった」
- ・「私が担当した子どもは遊びの時間も工作に使い、のこぎりを使ったり、やすりを使ったり想像以上に活動的だったため、子どもに振り回されてしまうことも多かったです。私自身もいろんな経験をすることができた。私はあまり男子と関わる機会がなかったため、同じ年や年下でも男子と関わることに苦手意識をもっていたが、今回の活動でその苦手意識が少しなくなったように思う」

これまでの学びの中で、「児童養護施設にいる子どもは本当にいろいろな事情を抱えている子どもが多いし、親から虐待を受けていたりすることもあるなど相当な覚悟をもっておかなければならない」という話を様々なところで聞いており、実際にこのボランティアを体験するまで、不安があったとも述べている。どのように子どもに接していくのか、事前のA施設とのオリエンテーションにおいても、職員から子どもの状況を伝えられているが、ボランティア活動を通して、子どもとふれあい、施設の生活環境に身をおかせて頂く中で、苦手意識や不安を軽減し、かたよったイメージを修正できるようになってきている。

2) 子どもたちとの関係をめぐる心境の変化

苦手意識や不安感を軽減していく過程には、子どもたちとの様々なやり取りがあり、学生なりに思考錯誤している状況があった。

「最初の方は自分の担当がどんな人なのか、どんな風に自分を見てくれるのかなどを探っているかのように、ダダをこねられ続けていたし、『この人イヤ。キライ。』などと言われたことが多々あった」とある学生は述べている。なかなか子どもにどのように話しをして良いのか、その対応に困る場面があっても、諦めることなく関わりを続ける中で、「その不安感が私自身も子どもたちに混ざって学習し、笑顔で遊ぶ中で少なくなっていました」と一歩一歩、子どもとの関わりを深める努力へとつながっていった。また学生にとって「きつい」表現方法でコミュニケーションを取る子どもがいても、「子どもたちのほうから“先生って〇〇?”と聞いてきてくれることがあったり、甘えてきてくれたりするようにもなりました」と学生にとって、子どもと関わりを持つことを意欲的に行う方向へと変化してきた。

学生の粘り強い関わりの中で、子どもたちとの距離がちまじり信頼へと関係が変わったこと

を実際に体験した意義は大きい。

3) 実際の関わりを通して得たこと

苦手意識や心境が変化する中で、学生自身が自分の取り組み方法や接し方を変え、子どもたちとの関係が築かれていったことなど、学生にとって大きな体験となっていった。その中で実際に子どもたちを通して得た気づきについては、イメージが変化することや、子どもたちに具体的にどのように接するのか、注意することの大切さ、自覚など多義に渡っている。

イメージの変化については、「児童養護施設のイメージは、家庭に近い環境というよりも、施設や児童館に近い形…」と思っていたことが、「見た目は大きな建物でも中は小さな家庭のように思う部分もあった」ことや、「正直、「施設の子」と身構えている部分があった」ことが、「実際接してみると皆普通の子どもであった」ことに転換してきている。同時に、この学生については、子ども固有の課題について「集中力が低いこと」や「独占欲が強いこと」があり、「自分が子どもの様子を見ることができて、自分が今できることは何かを考えることが課題である」と述べている。

また子どもたちと打ち解けたり、輪の中に入るためにコミュニケーションをどのように取るのが良いのかと考えていく中で、「観察をすること」が大切だと学んだ学生もいる。5日間という短い時間ではあるが、「子どもたちと良い関係を築き上げるためには日ごろから子どもをよく観察することも大切だと感じました」としている。そして一人ひとりの子どもの観察を通して、子どもの思いを受けとめたり、一緒に遊ぶことを通して信頼関係を結んでいくことにつながることを学んでいた。

加えて、集団で生活をしているため、一人の子どもだけの意見を通すのではなく、どのようにして全員の子どもの意見をまとめるのか、そのための良い雰囲気づくりの大切さについても思考錯誤し、工夫している様子であった。

さらに「自分の意見を持ちながらも、言葉にして伝えることがなかなかできない子どももいます。そのような子どもの思いも考えながら、私たちは子どもたちと接することが必要だと思いました」と、子ども一人ひとりの声を聞きながら、他の子どもの意見も尊重し、かつ子ども集団をまとめる難しさについて、今回のボランティアで学ぶことができたとのことであった。

これは同様に、子どもたち一人ひとりの気持ちに寄り添うことにつながっており、子どもたちの意見や要望をまとめることに留まらず、学習支援を行う上でその子一人ひとりの学びの進捗の差や、見通しを持って接することにもつながっている。ある学生は、「私は小学校二年の女の子の担当で、二人は性格も違えば学習の内容も違いました。同じ学年のため相手の学習の進度が気になったり、自分の宿題に集中できなかつたりで、学習の進め方には毎日悩みました」としている。子どもに寄り添いながら、一人ひとりに応じた援助の見通しを持つことで、子どもたちが安心して過ごすことができる生活環境を考えていくことにつながった。

施設でボランティアを行っている中で、子どもが大人との関わりだけではなく、子ども同士の結びつきが強いことにも気づいていく。施設の中でルールを守って生活をしていくことは、子どもが安心して集団生活を行うことであるが、子ども同士のケンカも起こりうることである。上記にも述べたが、大人が子ども一人ひとりの気持ちや意見を受けとめることも大変重要なことである一方、子どもの間に強い結びつきがあることで、子ども同士が話し合いや輪をまとめていく力になっている。

A施設で、高学年の子どもたちの集団をまとめていく姿を見ることで、子ども同士のつながりや関係の強さを知り、何に対しても大人のサポートがなければならない子どもではなく、子どもの主体的な姿を学ぶことにつながったものと考えられる。

学生は子どもたちとの直接的な関わりを通し、子どもにとってボランティアという存在と職員という存在の違いについても、驚いたようである。「実習中に子どもの行動で大人として注意しなければならないと思った行動に対して注意をしましたが、あまり聞いてくれませんでした。しかし職員の方が注意されるとその行動をぴたりとやめました。職員の方の注意の仕方をよく見てみると大きな声で語りかけるような言い方でした。そして職員の方との信頼を感じました。私の注意は一方的だったと思いますし、出会ったばかりの私に信頼はなく、おそらく私は「実習生の遊んでくれるお姉さん」だと子どもに思われてしまい、言うことを聞いてくれなかったのだと思います。大人としての自覚をもって子どもと接することに失敗してしまいました」と述べている。同じ大人であるが、日々接している職員と、短期間で決まった時間に関わるボランティアという存在が、子どもたちにどのように写っているのかを実際に感じ、それが自身の関わり方へのふりかえりにつながっていったと思われる。

今回の活動を通して、学生によって個々の気づきや失敗だと思う点、嬉しかったことなどは異なるが、やはり実際の子どものと接することで、どのようにコミュニケーションをとるのか、担当している子どもの性格やニーズを理解することの大切さ、そして子どもと触れ合うことで、気づく自分自身の内面にある様々な葛藤や価値感、感情などを気づくことへとつながったものと考えられる。ボランティア終了後に実習に行く学生も多く、A施設で学んだことや課題を実習につなげていくことで、より学びを深めることができ、前向きな姿勢を伺うことができた。

(4) ボランティアを受け入れて — A施設のふりかえり—

ボランティア活動が開催される前の第2回オリエンテーション(7/11開催)において、A施設から、施設長と担当職員2名に大学に來訪していただき、参加学生に児童養護施設の状況(子どもの様子と生活背景、学習の困難さや障害など)、今回のボランティア活動の内容、注意事項について丁寧な説明がなされた。

さらにふりかえりの会(8/29)にも、A施設から施設長と担当職員2名に参加をしていただき、施設側のふりかえり、感想、子どもたちの様子、児童養護施設で働くことについて(職員の体

験) などをお話いただいた。

職員は、子どもたちにとって充実した夏休みとなったことを学生に伝えてくださった。これまで夏休みの宿題は職員が見ていたが、子どもと大人が1対1で、過ごすことが難しい状況の中で、今回のボランティアを通し、子どもの悩みを聞いたり励ましてくれることで、子どもに自信が付き、心身ともに安定していくことが伝えられた。さらにふりかえりの会では、直接、学生から職員に学んだことや感想を伝え、学生が子どもと接する中で悩んだこと、判断が難しかったことなどについて、より深い気づきとなった。

A 施設長は、ボランティアに参加をすることで、学生にとって児童養護施設で子どもが生活をしている理解が深まり、施設側も園の中で当たり前になっていることが外からの気づきで変わっていくことの大切さも伝えられた。さらに児童養護施設は、日本社会の子どもたちのおかれている状況やかかえている課題の縮図であり、一緒に考えて支えていくことの重要性についても伝えられた。

B 職員からは、今回のボランティア活動があったことで、子どもたちが時間を決めて宿題を終わらせることができたこと、そしてそれが子どもたちの達成感や安心感につながったことが話された。施設の子どもたちは不特定多数の大人との関わりが多いために、「大人に慣れて」おり、実習生がいろいろなイメージを持って実習やボランティアに来るが、「児童養護施設の子どもだから…」という思いや捉え方ではなく、一般家庭の子どもと同じように接することの重要性についても伝えられた。

C 職員からは、学生のボランティアへの参加そのものの意義の大切さを語って下さり、非常に好意的に受けとめられていた。学生の「参加しよう」と思う意欲が出発点であり、子どもや施設を知ること、寄り添うことに挑戦した学生の姿勢について、前向きな評価を得ることができた。

さらにどの子どもをどの学生が担当するのかという担当を決めて行い、学生が自主的に子どもと話し合いながら学習の達成目標を決めて行ったこと、計画的に学習していくことの大切さについて、施設側として学んだとのことであった。

また子どもたちの学生に対する試し行動については、参加した学生が多く悩んでいる点であるが、逆に子どもたちが「安心できる存在」かどうか確認するための1つでもあることが伝えられた。

4. 今後に向けて—課題と可能性—

「Action! 子ども支援!」は、今年度、地域福祉フィールドワーク事業として新規に立ち上がった活動であり、今後も実習前教育の位置づけとして、またA施設との継続した関係を築いていくためにも、取り組む予定である。そのために、今後に向けての課題と可能性について述べる。

学生のふりかえりレポートと、ふりかえりの会から検討事項をいくつか取り上げる。

まず、事前オリエンテーションの申し伝え事項をより明確にして伝えていくことである。実習前の学生もおり、はじめて子どもと触れ合う機会となった学習ボランティアであるため、身体接触を求める子どもたちへの対応など、支援の上で配慮をしなければならない事項をより明確に伝えていく必要があることが課題として残った。

また5日間という短い期間であるため、子どもたちと関わる楽しさ、難しさを感じ、コミュニケーションを取れる状況にまで発展できたと学生が実感したところで終了してしまう。学生がより気づきや子どもたちとの関係を深めていくためには、もう少し期間を伸ばす方向性についても検討の余地がある。ボランティアであること、実習に行く学生もいることから、A施設と学生の状況を検討しつつ行いたい。

活動中の学生の支援を行うことへの課題である。ボランティア前、ボランティア後で、それぞれオリエンテーション、ふりかえりの会を開催した。しかしボランティア活動中のふりかえりの場を持つことがなかったため、それぞれの気づきや迷っていること、子どもの対応で難しいと思うことを教員とともに共有することが困難であったことが課題として残った。

今年度は、1回生から4回生までの学生を対象として実施した。4回生の3名を除く学生は実習前であり、その前教育としても大きな役割を担った。はじめて児童養護施設のボランティアに行く学生も多く、なかなか慣れない中で思考錯誤し悩みながら、子どもたちと接している状況があった。

来年度に向けて、いくつかの課題はすでに示した通りであるが、学生自身の可能性をより引き出すサポート体制を行っていくことと、またこのボランティアを機会に学生と子どもたちが継続的に関わるができる場づくりが必要となる。ボランティア期間をより長くすることの他に、A施設のバザーなどのイベントに参加させていただいたり、本大学の行事（大学祭、オープンキャンパスなど）を利用し、子どもたちが学生の生活にも触れる機会を持つことで、子どもたちが自身の将来につながるような取り組みを行うことへと、学習ボランティアを進めていきたいと考えている。

(西垣美穂子)

謝 辞

昨年度より、学習ボランティアの機会ならびに支援をくださっているA施設の施設長、職員の皆様、子どもたちにこの場を借りて、御礼を申し上げます。本当にありがとうございます。

(にしがき みほこ 佛教大学福祉教育開発センター)
(いべ きょうこ 佛教大学社会福祉学部)